

ムスリム女性の装い

民博 人類文明誌研究部 藤本 透子



ウズベク女性が着用したバランジ
(中国、H0105908、中央・北アジア
展示)

変わりの一端にもふれることができる。中央アジアにイスラームが伝播したのは、八世紀にさかのぼる。オアシス都市の定住民がいち早くムスリムとなり、草原地帯の遊牧民はそれより遅れてイスラームを徐々に受容した。

オアシス都市に暮らす女性は、一九世紀後半から二〇世紀初頭には、外出時にチャチヴァンとよばれる織り目の粗い布を顔の前に垂らし、バランジとよばれるヴェールをかぶった。バランジは丈の長い上着のような形をしているが、頭部からすっぽりかぶるので袖に手をおすことはなく、「デザイン化された「飾り袖」が後ろで結わえられている。一方、草原地帯に暮らすカザフ人の場合、既婚女性はキメシエクとよばれるヴェールを着用した。キメシエクは白い綿布を縫って作られ、頭部から胸部までを覆う。バランジに比べると丈が短く顔も出さすという、遊牧民としての動きやすさを重視した装いであった。

ソ連時代初期に、こうしたヴェール、特



西アジアをはじめとする各地のムスリム女性の服装
(H0253290ほか)



中央アジアのムスリム女性の服装
(H0105908ほか)



西アフリカのムスリム女性の服装
(H0222362ほか)



婦人服店の店先でマネキンがかぶっているヴェール
(000033771ほか)

にバランジはムスリム女性たちの後進性の象徴とみなされ、女性解放運動のターゲットとなった。バランジを一掃するキャンペーンがあまりにも急激に進められたために、社会的混乱も生じた。その後、中央アジアでは次第に、頭部のみにスカーフを巻くスタイルが既婚女性のあいだで定着していった。

ライフステージも反映

中央アジアの女性たちの装いは、もともとライフステージを反映したものであった。例えばカザフ人の場合、未婚女性は長い髪を三つ編みにして垂らし、毛皮で縁取りされた布製の帽子をかぶった。前述のようにキメシエクを着用して髪を見せないのは、既婚女性のみであった。既婚女性が髪を覆うという習慣は、スカーフを頭部に巻くというかたちで、ソ連時代にも村落部を中心に続いた。カザフ人のあいだで、嫁入りの際に花婿の母親が花嫁の頭部に白いスカーフをかぶせるのは、既婚者となったことを象徴的に示している。

生活場面による使い分け

ソ連崩壊後には、未婚か既婚かにかかわらず信仰心をあらわす服装として、丈の長いスカートに長そでの上着を着て、ヒジヨブとよばれる新しいタイプのヴェールをか

ムスリムの特徴として、ヴェールで頭部を覆い隠した女性の姿を思い浮かべる方も多いかもしれない。クルアーンには「外部に出ていける部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう」(井筒俊彦訳『コーラン』(中)岩波書店、一九五八年)とあり、身内以外に「美しいところ」を見せてはならないとされる。ただし、どのように身体を覆うべきかという具体的な記述はない。このため、イスラームが世界に広がる過程で、地域によってさまざまな服装が生まれた。

例えば西アジア展示場では、アラビア半島のベドウィンのほか、エジプト、アフガニスタンとともに、シンガポールの女性の服装を見ることが出来る。身体の線があらわにならないゆったりとした着こなしは共通するが、ヴェールの形や色、顔をどの程度まで隠すかはさまざまである。東南アジア展示場にも、ムスリム女性のファッションを示すコーナーがある。マレーシアの女性たちは、さまざまなヴェールの巻き方を考案して、おしゃれに工夫を凝らすという。また、頭部に華やかな色合いの布を巻き、首のまわりが広めに開いた西アフリカの女性の衣服は、ムスリムの装いの多様性を示している。

時代の変化とともに

中央・北アジア展示場では、装いの移り



ソ連時代に定着した、スカーフを頭部に巻くスタイル(カザフスタン、H0278396、中央・北アジア展示)

カザフの既婚女性が着用したキメシエク(中国、H0105922、中央・北アジア展示)

ぶる女性たちもあらわれた。しかし、全体から見ればこうした女性はごく少数にとどまっている。

特に都市部では、ふだんは何もかぶらない女性の方が多い。ただし、イスラームを強く意識しているようには見えない女性たちも、モスクに行くときや、聖者廟に詣でるときなどには装いを少し変える。モスクでは礼拝や結婚儀礼をおこない、聖者廟では子授けや病気の治癒を願う。また、墓参の際にも、死者の安寧を願ってクルアーンを朗唱する習慣がある。こうした祈りの場面では、スカーフで頭部を覆う。現在の中央アジアでは、このように生活の場面によって、柔軟な対応をしているムスリム女性が多い。